

比較文化の視点 —東京とロンドン为例にして—

高橋 正

はじめに

写真集『よみがえるロンドン—100年前の風景』には「王立取引所」(p.31)や「ピカディリー・サーカス」(p.83)を写した写真がある。この写真が撮影されたのは1896年頃と推定されている。『明治・大正・昭和 東京写真大集成』のp.56に「一丁倫敦」の写真がある。この写真は明治43年(1910年)ごろに撮影されたものと考えられている。どちらも都市が近代化されていく過程の1場面を撮影したものである。撮影年に10数年の差があるが、この2つの写真を見て、近代化の過程において1つの大きな違いがあることに気がつく。「一丁倫敦」は、三菱が1894年から1914年にかけて、イギリス・ロンドンの経済の中心街ロンバート街をモデルにして造った赤レンガ造りのオフィス街である。現在の丸の内の始まりである。オフィス街の建物だけを見ているとロンドンと変わらないように見える。この写真に写っている人々も、急速な近代化の結果、洋服を着ている。大きく違うのは、100年前のロンドンでは、cabriolet, omnibus, buggy, carriageなど様々な馬車が道を埋め尽くすように多く走っているのに対して、「一丁倫敦」の写真には、自動車が普及し始めたころなのでイギリス車のハンバーが1台写っているが、馬車が写っていない。その代わりに、人力車が何台か走っている。ロンドンと東京の近代化の要素の中で、馬車と人力車の普及という点が2つの大都市の大きな違いとなっている。

人力車は日本で発明されたといわれている。明治32年(1899年)2月10日に、

第13回帝国議会の衆議院で、人力車の発明者に年金を給与する建議がなされて、人力車の発明者と名乗る者が多くある中で、議会は明治3年(1870年)3月22日に東京府庁に人力車の製造と営業を願い出た3人のグループ、和泉要助・鈴木徳次郎・高山幸助を発明者として特定して年金を与えた。人力車の特徴は、腰掛の椅子に座る客を二輪で人がひく車である。このような車は、実は日本独自のものではない。齊藤(2014)によると、17世紀末から18世紀初頭にかけてフランスにも ヴィネグレット(vinaigrette)と呼ばれる人力車があった。人を乗せた車を人が引くというのは日本やアジアだけの発想ではなかった。ところがフランスでは人力車その後、発展・普及することはなかった。

日本で生まれた人力車は、日本全国に急速に広まり、明治13年(1880年)ごろより、インド・中国・東南アジアにも輸出されるようになる。自動車や鉄道が普及するまで、アジアで人気を博した乗り物である。英語でも rickshaw と呼ばれて、人力車の別名「力車(リキシャ)」から造語された日本語起源の英語である。人力車の普及は日本からアジア諸国に限られ、欧米に浸透することはなかった。欧米化によってどうしても変えることのできない部分が近代化にあるということが分かる。

なぜ、馬車が明治期に少なかったのか？ 古代より日本には野生馬は少なく、貴重な動物であり、神馬として神社に奉納されてきた。絵馬がその名残である。神聖な馬に車を引かせるという習慣が生まれてこなかった。日本では平安時代から貴族は牛に車を引かせ乗っていた。戦国時代の武田の騎馬隊のように、馬は武士が乗るものであって、車を引かせることはなかったのである。江戸時代には騎馬隊は幕府にとって軍事的に脅威となるために、騎馬の数を制限していた。1615年に江戸幕府は、旗本に対して、石高に応じて備えていなければならない騎馬の数を定めている。それによると、一万石の旗本で10騎、10万石以上では170騎である¹。1648年には、平和な時代になったのでその数が半減されている。車の使用も制限していた。もし馬車の利用が認められていたとしたら、参勤交代で用いて、随行し

¹ 早坂(1994) p.145

て荷物を運ぶ人夫の数をもっと減らすことができたであろう。しかし、山が多い日本では、街道が狭く、馬車の通行のためには街道をもっと広くする必要があった。また、雨が多いので、車輪はすぐに泥にはまり込んでしまい、馬の糞や尿が泥と混ざってしまい、そのあと乾燥して風などで舞い上がると衛生面で問題もあったと思われる。

そしてなによりも、日本とロンドンの近代化における違いは馬を多く保有して育てる文化と馬を飼育してこなかった文化との違いである。日本では明治時代まで牧畜を行ってこなかったので、広々とした牧草地はなく、気候の関係から草地も少ない。多くの馬が育つ環境ではなく、馬の数は少なく貴重な生き物であった。

明治時代の近代化の過程で、日本は物質的に西洋のものを取り入れてきたが、西洋そのものにはなることができず、日本という風土の制限を受けながら西洋のものを取り入れた。ただ受け入れただけでなく、人の力で運ぶ人力車を生み出した。2つの文化が遭遇するときには、一方の文化が他方の文化に移し変えられるだけではなく、新しいものが創造される。

ここまで、ロンドンと東京でほぼ同じ頃に撮られた2枚の写真から2つの文化の違いを考察してきた。文化比較という観点を持つと2枚の古写真から多くの文化の違いとその背後にある歴史や環境の違いを知ることができる。古写真が過去の都市の様子を今に伝えるだけではなく、現在の我々にとって格好の比較文化の教材となるのである。

この論文では、ロンドンの博物館や植物園のように、異文化から多くの人が観光で訪問する場所で見えるものが、文化比較という視点を持つことによっていかに異文化理解へとつながるかを例証するとともに、日本文化がイギリス文化の中でどのように変容してきたのかを検討する。

1. ロンドン塔の日本の甲冑と三浦按針

ロンドン塔 (the Tower of London) は多くの人が訪れる観光の名所となっている。その中にあるホワイト・タワーは中世以来武器の保管庫であり、展示場でもある。その展示物の1つに日本の甲冑がある。なぜこんなところに日本の鎧冑があるのだ

ろうか？

ロンドン塔は、征服王ウィリアム I世が1066年に建築を始めた城砦である。この年に、ウィリアムは、正統な王位の継承権は自分にあるとして、6月にイングランド王になったばかりのハロルドを10月にヘイスティングの戦いで破ぶり、イングランド王となる。この戦いの敗戦は、イギリス史上重大な出来事となった。ウィリアムは、フランスのノルマンディー地方を支配していたノルマン人であり、この年にイングランドの支配者になった人々は、英語ではなく、ノルマン人なまりのフランス語を話していたからである。これ以降約200年間はイングランドの公用語は支配者のフランス語となり、被支配者のイングランド人は英語を用いるという二重言語の状態となった。

イングランド人の反乱に備えて、建築を始めたのがロンドン塔である。ロンドン塔がある場所は、当時すでに1000年前にローマ軍が砦を築いてところであり、その城壁が残っていた。ウィリアムが、この場所を選んだのは、自分がかつてのローマ軍の支配者と同じように見ていたのかもしれない。

その中心的建物は、その外観からホワイト・タワー(the White Tower)と呼ばれて、1100年ごろには完成していた。当時はイングランド人にその力を示して威圧する壮大な建物であった。その後、歴代の王はこの城の守りを強固なものにするために、堀を作り、外壁や塔を建築し続けて、1380年ごろには現在のような形にできあがったといわれている。

ロンドン塔は、多目的な城である。まず、砦であり、王の家族の住まいである宮殿、政治犯を収容する牢獄であり処刑場。1835年までは、イギリスでは珍しい動物を集めた動物園でもあった。中世以降は、王室の王冠や宝石類などを保管している宝庫でもある。また、武器を保管しておく施設でもあり、保管してある武器や甲冑を展示するミュージアムでもあった。王は、外国から来た客に、この武器庫を見せて、王の力を誇示していたのである。現在でもロンドン塔のホワイト・タワーは武器の展示場であり、ヘンリー8世の甲冑などを見ることができる。ここには、外国から贈られた武器類も展示されていた。その1つに先ほど述べた日本の武将が身に着ける甲冑がある。

この甲冑は、1613年に、日本とイングランドがはじめて通商条約を結んだときに第2代将軍徳川秀忠がジェームズ1世に贈ったものの1つであるという。ジェームズ1世が王となり、スチュアート朝を始めたのが1603年で、家康が征夷大将軍となって江戸幕府を開いた年と同じである。ユーラシア大陸の東西の両端の小島で、同じ年にそれぞれの国の支配者になるという偶然に加えて、その日本の第2代目将軍が甲冑をジェームズ1世に送るという奇妙な偶然が続く。1613年はまだ家康も存命中で、家康が甲冑を贈ったと言ってもいいかもしれない。

日本が戦国時代の終焉へと向かうきっかけとなった関ヶ原の合戦の半年前の1600年4月に豊後国の臼杵(うすき)にWilliam Adamsの乗る船が19ヶ月の航海の後に漂着する。この航海は苦難と不運の連続であった。1598年6月にアダムズが航海長に就いた5隻の船団、旗艦ホープ号、ヘローフ号、リーフデ号他2隻がオランダを出航した。その目的は、香辛料を求めてインド洋や東シナ海の航路を開くためであった。しかし、アダムズの船団の船員たちが出航後すぐに病気になり、船団の司令官のJacob Mahuを失う。船員の病気を治すために、西アフリカのギニア湾に滞在するもアフリカで覇権を争っていたポルトガルの攻撃を受けるなどして、オランダの植民地がある喜望峯を目指したが、またしても謎の病気に襲われる。6ヶ月間に渡り、南大西洋をさ迷ったあげく、南アメリカ大陸の南端のホーン岬に到達して、1599年の9月には、荒れた天候に苦勞しながらもマゼラン海峡を通過して太平洋に出た。南米大陸沿いに北上しても、南米はスペインの支配下にあり、太平洋に入った5隻のうち2隻の船長や他の乗組員がスペイン軍に捕えられ処刑されてしまう。ヘローフ号は途中でぐれてオランダに帰還した。アダムズを含む生き残った2隻の乗組員はスペインの脅威のない日本へ向かうことを決意する。1599年のクリスマス・イヴには台風に遭遇してさらに1隻、ホープ号を乗組員もろとも失う。唯一生き残ったリーフデ号はついに1600年4月に日本に漂着したのである。そのときに生き残っていたのは24人で、そのうち6人はその年のうちに亡くなっている²。

² イングランド、メドウェイ市HP Local historyより。http://www.medway.gov.uk/leisurecultureandsport/medwaylibraries/creativemedway/writingmedway/danaadler.aspx

このウィリアム・アダムズは、江戸幕府がイギリスとの通商条約を結ぶことに尽力した人物である。徳川家康は、ヨーロッパの情勢や造船技術、砲術などの知識が豊富なアダムズを大変に気に入り、日本に残留させた。アダムズは家康の外交顧問として活躍して、家康から、三浦按針という名をもらう。イギリス人として初めての侍の地位を与えられた。アダムズの生まれ故郷ケント州メドウェイ市のGillinghamでは、“Gillingham’s own Samurai”として知られている。

この三浦按針は、1611年にインドネシアのバンテンにあったイギリスの居留地に手紙を書いて、日本との貿易を勧めた。それに応えて、1613年にジョン・サーリス(John Saris)が、イギリス王の親書を持って、クローブ号(Clove)で平戸にやってくる。按針は、サーリスを三河や江戸へ案内して、家康や秀忠と会わせた。江戸で秀忠はイギリスとの貿易を許可して協定を結んだ。この協定によって、平戸にイギリス商館が作られてイギリスとの貿易が始まったが、この商館が1623年に閉鎖されるまでの10年間にロンドンと日本に直接に積荷が運ばれたのは3回しかなかった。秀忠は、この協定を結んだときにジェームズ1世に2つの鎧冑を贈ったのである。

この鎧冑は、はるばると東シナ海、インド洋を越えてアフリカの南端を回ってロンドンのこのホワイト・タワーに納められた。少なくとも1661年まではホワイト・タワーに陳列されていたことは確かであるが、その鎧冑の説明は“a present from the Great Mogul.”となっていて、日本のものであることはすでに忘れられていた³。16世紀初頭から北インドを支配していたトルコ系のイスラム王朝であるムガル帝国と日本が混同されてしまっていたのである。祖国イギリスと日本の通商貿易を願っていた三浦按針はどのような思いでこの間違いを受け止めたであろうか？文化交流は継続しなければいずれ忘れられてしまう。

この展示の説明によると、この鎧に残っていた家紋から、元々は甲斐を治めていた武田勝頼のものであるという。1972年に三越デパートが資金を出してこの鎧冑を修復している。

³ ロンドン塔のこの展示の解説より。

2. ロンドンの寿司弁当チェーン店

著者が引率した語学研修の学生たちは、ロンドンの中心部に近い地下鉄の駅 Liverpool Streetにある学校に通っていた。その学校はビルが立ち並ぶオフィス街にある。その学校のあるビルの0階に、Japanese Canteenという食堂がある。昼休みには近くのオフィスに勤める人が昼ごはんを食べにきてほぼ満員である。日本食の人気の高さが伺える。広東麺などの中華麺も扱っている。この店のかつどんぶりがおいしかった。味付けは全く日本と同じである。日本では水を何も言わなくても出してくれるが、この店ではカウンターで要求しないと水を提供してくれない。この店の周辺には、その他に、「都」と漢字を用いている寿司屋や立ち食いのそばやラーメン店などがあり、ロンドンの中心街のオフィスワーカーには日本食が大変に人気である。

このオフィス街にはWasabiという名の弁当屋が何軒かある。寿司を中心とした弁当屋のチェーン店である。買った弁当を持ち帰るだけの小さな店から十席以上のテーブルがあり、そこで食べていける広い店もある。店の前には“Let's go Bento!”という看板が掲げられている。メニューの名前も“～bento”となっている。bentoという語はすでに英語になっている。オックスフォード新英英辞典(第2版)にも記載されていて、次のように定義している。“a Japanese-style packed lunch, consisting of such items as rice, vegetables, and sashimi”。複数形はbentosであることも示しており、完全に英語化している。

この店で「伝統的なちらし寿司」なるものを食べた。容器が大きかったので食べきれぬかと心配したが、ご飯は表面だけで中は野菜であった。つまり、このちらし寿司は野菜の上にご飯を薄く盛ってその上に、鮭、まぐろ、エビなどが並べられている。見た目は日本のちらし寿司と同じであるが、中身が違う。「伝統的なちらし寿司」としてロンドンで売られているものは日本の伝統とはかなりちがうものなのである。ちらし寿司だけでなく、野菜をとることができるので非常に健康的な食事ではある。カレーライスの弁当もあったが、カレーの味は全く日本風のカレーであった。反面、日本では見かけない弁当があり、味も日本人にはおいしいとは思えない弁当もあった。

セント・ポール大聖堂の入り口から道路を渡ったところに回転寿司屋がある。Yo! Sushiというチェーン店の1つである。従業員は「コレが東京」と書かれているTシャツを着ているが、日本人らしき人はない。すべて、地元のイギリス人である。白人のきれいなウエイトレスがメニューを持ってくると、「ここに来るのは初めてか」と聞かれた。会計の仕方が普通のレストランと違うからである。「日本式で、取ったプレートを残しておいて 後で皿の数を数えて会計をするのでしょうか」と英語で応えたら、その通りであった。日本は回転寿司の誕生したところである。大阪の立ち食いすし屋が発明したものだ。ロンドンで若い白人のウエイトレスから説明を受けなくても分かる。カウンターの席に座るとガリと醤油は置いてあったがお茶がない。日本のように無料でお茶が飲めるのはありがたいということに気がつく。飲み物は水も有料で別に注文しないとイケない。皿の流れる速さが日本より早いような気がする。さっとコンベアーから取らないと逃してしまう。皿の色によって値段が決まっているのも日本と同じであるが、一番安い色の皿で2ポンド20ペンス (£2.20) で、一番高いので£6.25であった。著者は6枚を食べて支払ったお金は£23.20であった。1ポンドをそのときのレートで150円ぐらいとすると3400円以上になる。高価な昼ごはんとなった。日本の回転寿司は、安さが売りであるがロンドンの回転寿司は高級レストラン並なのである。

先ほどの寿司弁当のチェーン店の名前にもなっている「わさび」は、イギリスでは、the Wasabi Companyが2010年より栽培を始め、現在、ヨーロッパで唯一各国に本物のわさびを提供している。イギリスの湿度の高い夏はわさびの栽培に適しているという。BBCによれば、この会社はわさび園のある場所やイギリスでの栽培方法は秘密にしているという⁴。井戸を掘って、ミネラルや養分が十分ある湧き水を利用して、わさびが自然の状態で育つ環境を作りだして栽培をしている。わさびの質や味はよく、ヨーロッパ中から日本人や日本人以外シェフもここのわさびを買い求めている。この会社のHPから注文すれば、1kgのわさびを250ポンドで手に入れることができる。寿司やさしみの普及でわさびも西洋に広がっていったが、欧米の

⁴ UK-grown wasabi charms European chefs <http://www.bbc.com/news/business-36424983>

シェフはいまや洋食にわさびを用いている。

ロンドンでも、寿司は着実に根を下しているが、その寿司はロンドンの環境の中で変容したものである。そして、その寿司に欠かせないわさびがイギリスでも栽培が始まっている。

3. 盆栽と Bonsai

ロンドンの中心街から地下鉄で50分ほどのところに、Royal Botanic Gardens, Kewがある。通称 Kew Gardens と呼ばれている。1759年に正式に設立された250年以上の歴史をもつ大植物園である。ヨーロッパの探検家が世界中から集めた貴重な植物を集めたのがその始まりである。探検家キャプテン・クックの1768年から1771年の航海に同行したジョセフ・バンクス卿がニュージーランドやオーストラリアから多くの珍しい植物を持ち帰って植物園として充実したコレクションを誇るようになった。250年以上にわたる園芸や植物学への貢献などが認められて2003年にユネスコの世界遺産に認定された。

132haもある広い敷地の片隅に Bonsai House がある。10個の盆栽が置かれている小さな温室である。展示場所の説明によると、Kew Gardens が持っている盆栽の数は60近くでその多くが、Ruth Stafford-Jones という女性が2001年に寄付したものである。Ruthさんは、日本語ができないにも関わらず、日本に行って盆栽の育て方を学んだ。この人はヨーロッパでいち早く盆栽の専門家になった人の一人である。その寄付したものの中に樹齢85年のイブキの盆栽が2つあり、これが英国に輸入されて、生き残っている最も古い盆栽である。

このように、盆栽はヨーロッパでは今はちょっとした静かなブームになっている。盆栽を含む植木の輸出額は、2005年は14.1億円だったのに対して、2014年には81億円を超えている⁵。東京・江戸川区にある盆栽美術館「春花園」には、最近海外から年間1万人以上の人を訪れるという。外国人の客に対応するために、英語

⁵ 農水省の統計より http://www.maff.go.jp/j/shokusan/export/e_info/pdf/26_hinmoku_meguji_kakutei2.pdf

で盆栽について説明をしなければならない事態となっている。日本では、盆栽は年寄りの趣味、金持ちの趣味であると考える人が多く、何年もかけて育てあげる盆栽は、速さと効率の良さを求められる現代社会を生きる若者には気の遠くなるような地味な趣味であり、古臭いものであろう。海外では盆栽は芸術作品として高く評価されており、小さな鉢の中で、人間が大胆に手を加えて、枝を剪定し、幹を湾曲させながらも、人工的な痕跡を残さず、あるいは見せずに、自然のままに年月を経た古木感を出し、木の雄大さを表現する。さらに、盆栽を見たときの古木感が日本のわび・さびを感じさせるのである。多くのヨーロッパの人々は、盆栽の中に自然の美しさを感じとるのであろう。日本ではお年寄りの趣味になってしまい、他の世代への広がりがないのは残念である。

さらに、盆栽は文字通り生きている芸術作品であり、成長を続け、変化していく。通常的美術品は、眺めて楽しむものであるが、盆栽の魅力の1つは、自らが手を加えて育てていくことである。自分の手によって素晴らしい作品にすることができる。それがヨーロッパ人の個人の力を重んじる傾向と合致することが人気の理由の1つであると思われる。その背後には、自然の木を自分の力で変えることができるという自然支配の西洋的原理が働いている。しかし、その原理はヨーロッパの庭園によく見られる、植木を人工的な幾何学的形に剪定する場合とは異なり、自然に力を加えることで新しい自然木を生み出すという環境保護的側面を盆栽の中に感じ取っているのである。

4. Kew Gardensの日本庭園の違和感

Kew Gardensの勅使門の周りに日本庭園がある。この勅使門は、1910年(明治43年)に開かれた日英博覧会で、京都の西本願寺唐門を5分の4の大きさで再現して出品されたものである。この博覧会は、経済大国であったイギリスとの通商貿易の拡大を図るために日本の産業を紹介するだけでなく、日本の風俗・文化をヨーロッパに伝えることを目的としていた。博覧会の会場には日本庭園も作庭された。勅使門は日本の文化紹介の1つとして出品されたものである。日英間でこのような博覧会による文化交流の裏には日英同盟という軍事同盟があった。

勅使門は、博覧会の終了後に、Kew Gardensに移築されたが、それから80数年
が経ち、老朽化が著しくなったので、1994年から95年にかけて修復されている。
その修復の際に、桃山時代の様式に基づいて回遊式の枯山水の庭園が新たに作られ
た。この日本庭園のテーマは「躍動」で、大小の岩によって、滝・山・島・海を表
わしている。入り口とされる場所から勅使門へ少し上るところには、茶室の露地が
あり、灯籠、飛び石、手水鉢が配置されている。この部分のテーマは「静寂」である。

庭園と露地は全く日本のものと同じように作っているのであるが、なぜか日本で
見る庭園と印象が違う。なにか日本らしくないのである。それは、周りが広々と
した芝生であり、芝生の中に植えられている木々も整然と規則正しく配置されて
いるからであるように思われる。そのような環境は日本の自然にはない。日本では、
広々とした芝生に木が規則正しく植えられている公園や緑地は現在ではあるが、そ
れは日本庭園とは呼ばれない。日本庭園の特徴は、庭園そのものだけでなく、人が
手をつけていない(あるいは人工的にならないように手入れされた)自然の中にある
ことであり、その周りの景色も生かしているのである。例えば、香川県高松市にあ
る栗林公園は、紫雲山を借景にして13の築山をして庭や池の背景には緑豊かな山を
配して視界を遮っている。そえによって自然の中に抱かれた庭という景観を生み出
しているのである。兼六園のように周りに高い山がない場合には、土地を掘って池
にして、掘り出した土で築山を造り、土地に高低の起伏を造ることでそれぞれの場
所から異なる庭の景色を楽しむように設計されている。庭の周りに高い樹木を配置
しているので、庭や池の先に見えるのは緑の木々である。庭園の中の小道は直線
ではなく、カーブを描いており、先が見通せない。視線を遮るものがない広い場所
は日本的でなく、そのような環境の中に日本庭園を造っても、周りと馴染まない。
異なる自然観をもつ国の環境におかれて、初めて日本庭園の特徴が明らかになる。
広い芝生と幾何学的に配置され、刈り込まれた木のある環境の中では日本庭園は不
自然に見えるのである。自然を模した日本庭園は自然の中にあることでその美しさ
が際立つのである。

Kew Gardensには、日本の民家もある。そのわら葺の屋根は日本のものに比べ
て非常に薄い。厚みがないのである。この民家は1900年ごろに岡崎市の郊外に

建てられたものである。この家の主が1993年に亡くなったあと、空き家となった。日本民家再生協会がこの家を買取り、日本で解体して、木材の枠組みをイギリスまで運んで、Kew Gardensで熟練の日本人大工が2週間ほどでそれを組み立てた。その後は、イギリスの大工が壁を塗り、屋根を葺いた。このときに屋根を葺いたのは、1997年にテムズ川南岸に再建されたグローブ座にかかわったイギリスの職人である。そのために、この民家の屋根は、日本の茅葺やわら葺と違って厚さがなく、わら葺の屋根に厚みがなく、日本の民家らしくないのはイギリスの職人がノーフォーク・ヨシと麦わらを用いて屋根を葺いているからである。この民家は日英合作なのであり、本物の日本の民家でないのが残念である。この周りは、竹の種類を展示する場所となっており、様々な竹が植えられており、周りの雰囲気と民家が調和している。日本のものは日本的な自然環境の中にあつてこそ本来の日本らしさが出てくる。文化的な事物は、その文化の環境の中にあつてこそ本当の姿を現すのであつて、事物だけを異文化の環境に持ってきてても本当の文化の理解は得られない。

5. ラッシュ・アワーのロンドン地下鉄の乗り方

ロンドンの中心街を走る地下鉄の朝の混み具合は、日本と同じくらいに凄まじい。混み過ぎて駅の改札が閉鎖されることもある。混んでいる電車に乗るためには、日本では駅のプラットフォームに電車のドアが来る位置が示されていてその前に2-3列で並んで電車を待つ。ロンドンではプラットフォームには電車のドアの場所や並ぶ場所は示されていない。ロンドンの人は、電車のドアがどのあたりに来るかを経験的に知っていてその前に群がるように集まる。2-3列に整然と並ぶようなことはしない。電車が到着すると下りてくる人が通れるぐらいのスペースを空ける。そして、人が乗るとドア付近で人が満杯になるまで乗るが、乗るスペースがなくなると無理に人の中に押し込んでまで乗ることはしない。無理に押し入ろうとするのは礼儀正しい行動ではないのである。

ある朝にラッシュ時に満杯の地下鉄に乗っていると30代ぐらいの女性が無理やり人に人を押しつけるようにして乗ってきたことがあつた。押し込まれた中年の男性が、「礼儀を知れ」というようなことをいうと、無理に乗ってきた女性は「私も急い

でいるのだ。礼儀に反していることはしていない」と言い返してきた。

あるときに、やはり急いでいた私はドア付近まで人で一杯の地下鉄に乗ろうとしたが、見事に押し出されてしまったことがある。混んだ電車ではあるが、お互いもっと詰めて一人でも乗せてあげようとする気はロンドンの人にはないようである。電車に乗れない場合は次の電車を待つことになるが、地下鉄がホームに入ってくるときに危険なので、広めに自分の前にスペースを空けると人がそこに横から入ってくる。それで電車に乗れなかった人はプラットフォームから30センチぐらい離れて立って次の電車を待つ。そこに黄色い線が引かれているからである。日本よりかなり線路寄りであり、地下鉄がかなり早いスピードでホームに入ってくるので、日本での離れた距離に立つことに慣れているとかなり危険を感じる。しかし、意外と事故は少なく、私が滞在していた3週間で、地下鉄では人身事故がほとんどなかった。

このような地下鉄の状況を毎朝、経験して思うことは、「不確実性回避」におけるイギリスと日本の違いである。これは、オランダの社会心理学者ホフステードが、世界各国の勤労に関する価値観を調査したときの項目の1つである。この調査は1970年代に行われてデータが古いですが、30年以上たっても「不確実性の回避」「男らしさ」「長期的思考」の指数は、若干の増減があっても安定しており、国の相対的な位置づけには大きな変化はない⁶。不確実性の回避とは、ある文化の人々が、不確実な状況や未知の状況に対してどれほどの脅威を感じるかということである。不確実性回避の傾向が強い文化では、曖昧さ、未知、予知不可能な状況に不安やストレスを感じるのでそれを避けようとする傾向が強い。その不安を解消するために、多くの規則や約束事を作り、その規則どおりに仕事などを進めようとする。日本はこの傾向の強い国である。

この傾向は地下鉄の駅では次のような形で現れる。まず、日本の場合である。ホームには、駅に入ってくる電車に接触する危険を避けるために、線路から十分に離れたところに黄色い線が引かれている。次に、電車が止まったときのドアの位置が示

⁶ 『ジェトロセンサー』2016年4月号 「ホフステード特別インタビュー」p.5

されて、そこで何列で並んで待つかということまで決められている。東京の地下鉄では、ホームに書かれている停車時のドアの位置で黄色い線の後ろの列に並んでいれば安全かつ確実にラッシュ・アワーでも電車に乗れる。入り口付近が一杯でも乗ろうとすれば、さらに奥へ移動して乗せてくれる。不確実性がかなり回避できる。

イギリスは不確実性回避の低い国である。電車のドアがどの位置になるのかという表示はない。ドアの位置を予想して、そこに人々は団子状に群がる。自分の前に少しでもスペースを空けると横から人が割り込んでくる。次に来るほぼ満員の電車に乗るには、多少危険があっても、ホームと電車の間に最低限のスペースを空けて待つしかない。遠慮をして後ろに下がって電車を待ってはいつになっても乗れないのである。語学研修でホーム・ステイをしていた学生も、朝に地下鉄などの電車に乗るのに何本かの電車をやり過ごしたと言う話をよく耳にした。電車に乗れないという経験を何度かして、不確実性回避の低い国でラッシュ・アワーの地下鉄に乗るコツを学ぶ。

日本の地下鉄やJRの駅で、海外の旅行者が駅で並ぶことなく電車に乗ろうとしている光景を時々見かける。それを見た日本人はマナーが悪いと思ってしまう。その人たちは、アメリカや中国のような不確実性回避の低い国からの旅行者である可能性がある。マナーが悪いのではなく文化の違いかもしれないのである。

6. 大地震のないロンドン

ロンドンには無料で入れる美術館や博物館がいくつもある。自然史博物館(Natural History Museum)もその1つである。レッドゾーンというところでは地震がどのようにして起こるのかを解説しているコーナーがある。そこには実際に地震の揺れを体験できる場所がある。阪神・淡路大震災の揺れを、神戸のスーパーマーケットで体験するという趣向である。ちょうど筆者が訪問したときには、ロンドンの小学生の団体が、その揺れを体験していた。キャッキョと大きな声を出していたが顔はどこか楽しそうであった。子供たちにはどこかの遊園地のアトラクションのようにしか思えないのであろう。

ロンドンでは大きな地震がないためにその怖さを実感できないのかもしれない。

イングランドで21世紀に入ってから起きた大きな地震は2002年9月のWest MidlandsのDudleyで起きたマグネチュード5.0の地震と2008年のLincolnshireで起きたマグネチュード5.0を超える地震ぐらいである。森田(2014)の統計によると⁷、1900年以降で「10名以上の死傷者」「100名以上の被害者数」「国際的な援助要請」「非常事態宣言」のいずれかに該当する災害を調べた結果、日本では44件の大きな被害を出した地震があるのに対して、イギリスでは、死傷者がでるような地震は皆無である。イギリスは地震の被害がほとんどない国である。

1995年の阪神・淡路大震災のときには、筆者の親や親戚が、大阪や神戸に住んでいたので、家が大きな被害を被った。両親の住むマンションの外壁は落ち、叔母のマンションは住めないぐらいに破壊された。あの揺れの中で、多くの人が亡くなり、生き残っても家が倒壊したり、火災にあったりした。そのときの被害だけではなく、その後も多くの人が避難所生活を強いられて、苦難な人生を歩むことになった。地震の被害が歴史上ほとんどないイギリスでは、地震の破壊力とその恐ろしさをどうしても実感できないのではないだろうか。

自然史博物館の「地震のあとの危険」というテーマの下では、東日本大震災のときに、津波が家を飲み込み、車などすべてを押し流す様子が繰り返し上映されていた。あの地震を経験した人間には、直視するのがつらい映像である。

地震に関する神話を紹介するボードがあり、古代ギリシアのような地震のある地域の神話が紹介されている。哲学者のアリストテレスは、地下で吹いている風が上に向かって吹いたときに地球表面が時々揺れると考えたとそのボードは述べている。インドでは、世界は8頭のゾウが支えているので、そのゾウが疲れて頭を下にしたときに地震が起きるといふ神話が紹介されている。その説明の下に、鯀(なまず)の剥製があり、日本では大鯀が暴れると地震になる。そして、その横に、江戸時代のいわゆる鯀(なまず)絵の写真が展示してある。「しんよし原大なまずゆらひ(由来)」という瓦版の大鯀絵で、新吉原の遊女たちが大鯀を懲らしめているところを描いている。1855(安政2)年の安政江戸地震のあとにこのような鯀絵が大量に描か

⁷ 森田(2014) p.103

れた。鯨が描かれるのは、次のような伝説に基づいている。地下深くに地震鯨がいて、鹿島大明神が「要石(かなめいし)」の力で押さえつけているが、たまに地震鯨が暴れると地震になる。そのため、鯨絵の中には、地震鯨が鹿島大明神に叱責されているものもある。鯨絵は風刺画でもある。地震で混乱した世相を面白く、皮肉っている。先ほどの「しんよし原大なまずゆらい」では、大鯨を懲らしめている遊女たちの方に向かって走ってくる数人の男がいる。その中の男は「おいおい、そんなにぶちなさんな」と鯨に同情している。大鯨を擁護しているのは、建築に携わる大工や左官である。家が倒壊したために、震災のあとは大工や左官がいたるところで必要となり、大もうけをしたことを揶揄しているのである⁸。

イギリスの地震に関する神話は紹介されていない。『イメージ・シンボル事典』でearthquakeの項目を見ても、ギリシア神話か聖書からの引用がほとんどである。唯一、シェイクスピアの『ヘンリー4世第一部』で、地震は偉大な人物の誕生を表わすという記述がある。おそらく地震に関する神話や伝承はイギリスには非常に少ないのである。

日本とイギリスの大きな違いの1つは大地震のある国とない国ということである。日本の周辺には、北米プレート、太平洋プレート、フィリピンプレート、ユーラシアプレートと4つのプレートがぶつかりあっているのに対して、イギリスでは、ユーラシアプレートやアフリカプレートから離れたところにある。この2つのプレートがぶつかるスペイン南部からイタリア、ギリシアでは地震が多い。

日本で数十年に一度起こる大地震は日本人の自然観や人生観に何らかの影響を与えているように思われる。地震によって、長年に渡って築き上げてきた家や土地、そして家族が一瞬にして破壊され、形あるものはかならず減ぶという無常観を生み、いつかは無に帰するという日頃の覚悟が震災のときには冷静な行動となって表れているのではないか。

⁸ <http://www.lib.u-tokyo.ac.jp/tenjikai/tenjikai2008/collection5.html> 「かわら版・鯨絵にみる江戸・明治の災害情報—石本コレクションから」を参照。

まとめ

この小論では、ロンドンの中の日本文化がどのような形で紹介され、どのように変容するのかを事例をあげながら検討した。第1節では、ロンドン塔のホワイト・タワーの日本の甲冑がインドのムガル帝国からの贈り物とされたことから、日英の交流に尽力した先人たちの努力を無にしないためにも、文化交流を継続することの重要性を指摘した。第2節では、ロンドンでの寿司のチェーン店が日本と異なる点をあげて、ロンドンという文化的文脈で日本的なものがどのようにイギリス的なものになっているかを述べた。第3節では、盆栽の捉え方が日英で異なり、ヨーロッパでブームになっているのは、自力で自然を変えていく芸術作品であることが西洋的自然観と響きあうところがあるためではないかと指摘した。第4節では、Kew Gardensにある日本庭園の不自然さは、日本の自然環境の中にその庭園が置かれていないことにあると述べた。日本の風物は日本の自然の中でその輝きを増すのである。第5節では、ラッシュ・アワーのロンドンの地下鉄の乗り方の中に、日本とイギリスにおける「不確実性回避」の程度の高さの違いが表れていることを論じた。第6節では、大地震のないイギリスでは、地震に関する伝承や伝説が少なく、歴史上、地震による大きな破壊を経験していないことは自然観や人生観に大きな影響を与えていることを述べた。

この論文では、ロンドン観光でよく訪れる場所にある日本文化を取り上げている。これは観光を単に物見遊山とするのではなく、比較文化の視点から見ることによってその国の文化だけでなく、自国の文化の理解にも役立つことを示すためである。

参考文献

- 石黒敬章 (編・解説) (2001) 『明治・大正・昭和 東京写真大集成』 新潮社
- 楠本町子 (2014) 『日英博覧会における日本の展示』 『愛知淑徳大学論集—文学部・文学研究科篇』 第39号 pp.17-32
- 齊藤俊彦 (2014) 『人力車の研究』 三樹書房
- 早坂昇治 (1996) 『馬たちの33章—時代を彩ったうまの文化誌』 緑書房
- バーチ, ジョージ H. (2005) 『写真集 よみがえるロンドン—100年前の風景』 出口康夫 (訳) 柏書房
- フリース, アト・ド (1984) 『イメージ・シンボル事典』 山下主一郎他 (訳) 大修館書店
- ホフステード, ヘールト他 (2013) 『多文化世界—違いを学び未来への道を探る』 第3版 岩井八郎・岩井紀子 (訳) 有斐閣
- ホフステード, ヘールト (2016) 『特別インタビュー グローバルビジネスを成功に導く 外国人材活用の秘訣』 『ジェットロセンサー』 2016年4月号. pp.3-5
- 森田康夫 (2014) 『イギリスの中学地理教科書と国土教育—英国の地理・地学— 一体教育から学ぶ『防災のカタチ—』』 『JICE REPORT』 第26号 pp.103-116
- 「かわら版・鯰絵にみる江戸・明治の災害情報—石本コレクションから」
<http://www.lib.u-tokyo.ac.jp/tenjikai/tenjikai2008/collection5.html> (2017年5月5日閲覧)
- 財務省「貿易統計」を基に作成した農水省の統計より
http://www.maff.go.jp/j/shokusan/export/e_info/pdf/26_hinmoku_meguji_kakutei2.pdf (2017年5月14日閲覧)
- イングランド, メドウェイ市HP Local history.
<http://www.medway.gov.uk/leisurecultureandsport/medwaylibraries/crativemedway/writingmedway/danaadler.aspx> (2017年4月29日閲覧)
- BBC News HP. “UK-grown wasabi charms European chefs”
<http://www.bbc.com/news/business-36424983> (2017年3月2日閲覧)